

# 大業拾遺記について

久保卓哉

## 目次

大業拾遺記について	
大業拾遺記（隋遺録 卷上）訳注	
大業拾遺記（隋遺録 卷下）訳注	
大業拾遺記（隋遺録）跋 訳注	
無名氏の跋文について	
『山房集』輯録跋 訳	
魯迅校録『唐宋伝奇集』収『隋遺録』について	
校定 大業拾遺記（隋遺録 卷上）	
校定 大業拾遺記（隋遺録 卷下）	
大業拾遺記（隋遺録）跋 原文	
『山房集』輯録跋 原文	
注 説郭・百川学海等十三種対照大業拾遺記校勘表	

## 大業拾遺記について

隋煬帝の宮中秘事を、史実に沿いながら描く『大業拾遺記』は、文献学の上でも目録学の上でも、興味深い材料を私たちに提供してくれる。それについては李剣国に詳細な報告があるののでそちらにゆずるが、小説史の上でいえば、この書が『隋煬帝海山記』、『迷楼記』、『開河記』の成立に影響を与えて唐宋小説史をにぎわし、明・馮夢龍はこの書の原文と構成をほぼ踏襲して『醒世恒言』巻二十四を著し、また同様の書として、唐・杜宝の『大業拾遺』一巻、『大業雜記』十巻、唐・趙毅の『大業略記』三巻があり、この書との関係が推知される。文献学の上でいえば、この書に登場する陳後主の「小窗詩」に関して、宋代の詩話には後主の作ではなく唐・

方**拔**の作であるという主張（北宋・蔡居厚撰『詩史』、北宋末南宋初・阮閱撰『詩話總龜』、南宋・姚寬撰『西溪叢語』、南宋・王明清撰『揮塵錄余話』）と、後主の真作の詩と見なす北宋末南宋初・釈惠洪撰『冷齋夜話』の見解があり、それを受けて、詩集の編纂においても異同がみられるという事象がある。『全唐詩』は巻七百七十五に**方拔**の失題詩として輯録しているが、明・馮惟訥輯『詩紀』巻一百八は陳第一後主の末尾に「付録」と題した項目を設け、「按ずるに小説家載する所の後主と煬帝の諸詩は、辞多く類せず、其れ後人の依託たること疑い無し。今別に此れを付して以て省覽に備ふるのみ。」と付記してこの詩を輯録している。これは明・張溥輯『漢魏六朝一百三家集』も同じで「付」と題してこの詩を輯録しているが、丁福保輯『漢魏六朝名家集初刻』は「付録」も「付」もなくこの詩を陳後主集の末尾に輯録している。しかし、同じ丁福保が編纂した『全漢三国晋南北朝詩』は、「按ずるに小窗詩は、姚寬の西溪叢話に、此れ乃ち唐人**方拔**の詩なりと云ふ、故に載せず。」と按語を記すのみでこの詩を採録せず、**巴**欽立輯校『先秦漢魏晋南北朝詩』は按語をも記すことなくこの詩**そのもの**を採録していない。

また、目録学の上でいえば、北宋・王堯臣等奉勅撰『崇文総目』巻二史部雜史類上が「大業拾遺一卷 顔師古撰」と、『大業拾遺』と録しているのが最初で（『宋史』巻二百三芸文志二伝記類も同じ）、宋元代の

目録はこの書を『南部烟花録』一卷と録し（南宋・晁公武撰『郡齋讀書志』巻二上雜史類、南宋・尤袤撰『遂初堂書目』小説類、元・馬端臨撰『文獻通考』巻一百九十五経籍考二十二雜史）、また『大業拾遺記』一卷と録し（『遂初堂書目』雜史類）、また『大業拾遺録』と録し（南宋・鄭樵撰『通志』巻六十五芸文略第三雜史）、また『隋遺録』一卷と録する（『宋史』巻二百六芸文志五小説類）。

現存する版本では『大業拾遺記』として伝わるこの書が、宋元の目録に『大業拾遺』『大業拾遺録』とも録されているのは、書名の末字をこのように記した一巻本が通行していたからであろうし、また『南部烟花録』という書名は、この書の巻末に見える跋文に、原名は『南部烟花録』という、と由来が明記されていることから、この原名を冠した一巻本が通行していたからであろう。だが『隋遺録』という書名は、『宋史』芸文志においてだけ見え、いささか突然の感がする。これについて李劍国は『宋志』だけに見えるのは、宋人が改題したからだろう」といい、李時人も『隋遺録』の名は後人が擬作したものだ<sup>(2)</sup>、というように、元來伝わる書名ではないようなのだが、南宋・計有功撰『唐詩紀事』巻四虞世南に、「顔師古『隋朝遺事』載、洛陽獻合蒂花、煬帝令袁宝兒持之、号司花女。…」と見えることからすると、当時においては『隋遺録』のみならず『隋朝遺事』とも改題された版本が通行して

いたと考えられる。したがって『宋史』芸文志に録された『隋遺録』という書名に突然の感をいだく必要はないのである。これらのことから考えると、この書は相当に広く世に出まわり、またひとびとから受け入れられていたといえよう。

宋・左圭輯『百川学海』はこうした伝本のうち『隋遺録』一巻を上下二巻に分かちて輯録したもので、元末明初・陶宗儀纂、明末清初・陶歿重輯『說郛』は『大業拾遺記』一巻の伝本を輯録したものであるようだ。<sup>3</sup>この『大業拾遺記』について論じたものは、今のところわが国において未見である。よって、以下に訳注を施し、諸本との校勘上気づいたこと、特に魯迅校録『唐宋伝奇集』に収める『隋遺録』との校勘上気づいたことを述べておく。

## 大業拾遺記（隋遺録 卷上） 訳注

（隋煬帝）大業十二年（六一六年）、煬帝は江都（揚州）に行幸することになり、越王侑ゆうに東都（洛陽）の留守を命じた。\*

\* 歴史的事実としては、留守を命じられ

たのは越王楊凝凝で、楊侑（後の恭帝）

はこのとき越王ではなく代王。『隋

書』卷四煬帝紀下に、「大業十二年：秋七月：甲子、幸江都宮、以越王凝：等総留後事。」とある。明・馮夢龍撰『醒世恒言』卷二十四は「越王凝」としている。

宮女の半分は行幸に随従しないことになったので、争つて泣きながら帝をひきとめて、

遼東は小国で、わざわざ行幸なさるまでもござい  
ません。どうか他の人にお行かせなさいませう。

と言った。車に手をかけて心から惜しみ、指の血が鞅（むながい 車を引く馬の首にかける皮ひも）を染めた。帝は思いを改めず、戯れに飛白（墨の色がかすれた書体）で二十字の詩を書いて留守をまもる宮女に与えて、

好  
我は江南の好きを夢み  
我夢江南

在  
遼に征くも亦偶然  
征遼亦偶然  
但だ顔色を留めて在れ  
但留顔色

離別は只だ今年のみ  
離別只今年

わたしは江南の美しさを夢に見、このたび遼東に行くのも偶然のこと。お前たちは美しさをとどめてい

ておくれ、離別は今年だけだよ。

と詠んだ。

帝の車は出立し、将兵百万が前を行く。大きな橋がま  
だできていないので、別に雲屯將軍の麻叔謀に、黄河  
を浚さらつて荷水の堤に入れ、巨大な艦船が通れるよう  
にするように命じた。麻叔謀は命令を引き受け、はな  
はだ過酷に鉄脚木鵝もくが（水深測量具、上流から流して止  
まればそこが浅いことがわかる）を使って水深を測り、  
木鵝が止まれば、河を浚う人夫が忠誠ではないと、部  
隊を水の中で水死させた。子供が泣いていても、「麻胡  
が来た！」と言うのを聞けば、今でもすぐに泣きやむ。  
その流言がかくも人を畏れさせたのだ。

帝が都を離れて十日のこと、宋の何妥かたが献上した  
車のところにおでましになつた。車の前輪は高く広く、  
大きな釘が刃物となり、後輪は低く、柔らかい楡にれの  
木で造つて、滑らかでひつかからないようにし、牛に  
御しやすくさせている。都から荷郡べん（開封）まで、  
毎日車に陪従する女がついた。車の帷帳には鮫翁うすまぬの網  
を垂らし、玉片の鈴をつなぎ連ね、進めば玲瓏りんりんと美し  
い音、それが車中の談笑の声をやわらげて、周りに聞  
こえないようにと願っているかのようだった。

\* 何妥の名は『隋書』卷七十五儒林伝

に見える。その何妥伝は、「十七にし

て技巧を以て湘東王に事ふ。」と伝え

る。何妥は隋の文帝に仕えて国子祭  
酒となり、その官職のまま卒去して  
いる。『隋書』卷六十八何稠伝に、何  
妥の兄の子、何稠の伝がある。何稠  
は、煬帝が揚州に行幸する際、煬帝  
の命に応じて、工人十万余人を使つ  
て金銀錢物を豊富に用いた車や車  
の飾りおよび百官の儀服などを造つ  
ている。唐・闕名撰『迷楼記』（『煬  
帝迷楼記』）には、「大夫何稠、童女  
の車を進む。車の制度絶小にして、  
只だ一人を容るのみ。機有りて其  
の中に処き、機を以て女子の手足を  
擬さふれば、織す毫も動くこと能は  
ず。」云々と、何妥ではなく何稠が造  
つた車が登場している。

長安から、車に陪従する娘袁宝兒が献納された。年の  
頃は十五、腰つきが細く柔らかく、艶めかしきことこ  
の上ない。帝はこよなくお気に召し格別な思い入れ。  
時に洛陽から蒂へたつきの迎輦花げいれん（天子の車を迎える花）  
が捧げられ、

嵩山の小村で採りましたが誰もその名を知らず、  
採った者がこれは珍奇なものとおもひ献納しまし  
た。

とのこと。ちょうどそこに帝の車がお越しになり、「迎  
輦」とお名づけになった。花の外側は深い紫、内側には  
白い脂が馥郁と香り、花粉をつけた薬しやくの、その芯は  
深紅、花の萼がくは争って二つの花弁をつけていた。枝と  
幹は翡翠色で通脱木つうだつぼくに似て、棘とげがなく、葉は丸く長  
く薄い。その香りは馥郁として、着物に染みこめば数  
日消えず、嗅げば人を眠らせない。帝は（袁）宝児に  
その花を持たせて「司花女しけんな」（花を持つ女）と呼んだ。  
そんな時帝は虞世南よせなんに命じて帝の側で「征遼の指揮  
德音の勅しやく」を遼を征討する指揮と報償に関する天子の命  
令しやくを起草させていたが、宝児はそれをしげしげと見  
ていた。

\* 司花女：後周・王任裕撰『開元天宝遺事』に、「花妖。初有木芍薬、植於沈香亭前、其花一日忽間、一枝兩頭、朝則深紅、午則深碧、暮則深黄、夜則粉白、昼夜之内、香艷各異。帝謂左右曰、此花木之妖、不足訝也。」とある。朝には深紅の色をつけ、昼は深緑色になり、暮れには深黄色になり、夜には白色になる花で、昼夜の内でも香りと色がそれぞれ異なる、神秘的芍薬。宋・皇都風月主人輯『綠窗新話』巻下「袁宝児最多**輕態**」周夷評は、『開元天宝遺事』

を引いて司花女袁宝児の多態さに関連づけている。

\* 虞世南：陳初から唐初の人。呉の顧野王に学を受け、文は徐陵から高い評価を受けた。隋煬帝の大業中は秘書郎の任にあり、煬帝からその才能を愛された。『旧唐書』巻七十二、『新唐書』巻百二に伝がある。

帝は虞世南に言った。

昔からの言い伝えによると、飛燕ひえんは手のひらの上で舞いが舞えたというが、朕はいつも、儒生たちが表現を飾ったのであって、人間にどうしてそのようなことができようか、と思っていた。ところが今、宝児を手近に見て、まさしく昔の言い伝えが本当だと分かった。しかし無邪気なしくさが多い女で、今、お前をしげしげと見つめている。お前は才人だ。あれをからかった詩を作るがよい。

\* 飛燕：漢・成帝の後、趙飛燕。漢の伶玄の作と伝わる『飛燕外伝』に、「纖便輕細、拳止翩然、人謂之飛燕」とある。また『漢書』巻九十七下外戚伝孝成趙皇后に、「学歌舞、号曰飛燕」とあり、顔師古は、「以其体輕故也」と注している。趙飛燕を題材にした唐宋小説に、『飛燕

遺事』(唐・闕名撰)、『趙后遺事』

(宋・秦醇撰)があり、唐・楊貴妃のこ  
とを記した『楊太真外伝』(唐・樂史

撰)巻上では、『漢成帝内伝』を引いて、  
「漢成帝獲飛燕、身輕欲不勝風。恐其飄  
糾、帝為造水晶盤、令宮人掌之而歌舞」  
と描写している。

虞世南は詔に依じて、絶句を作った。

鴉黄を画くを学び 半ばにて未だ成らず

垂れし肩 砧れし袖 太だ輕生なり 学画鴉黄半未成

輕に縁りて却って得る 君王の惜み 垂肩砧袖太輕生

長く花枝を把りて 輦に傍って行く 緣輕却得君王惜

長把花枝傍輦行

額に描く黄粉の引き方を学んだのに、まだうまくで  
きない。なで肩の指の先には袖が垂れ下がり、なん  
とも嬌痴あふれる姿。その痴態によつてかえつて帝  
の寵愛を得、いま花の枝を手に持ち、帝の車に寄り  
添っている。

\*鴉黄：婦人の額に化粧する黄粉。六朝  
の女性は黄粉を額に引いた。輕黄とも

いう。豫信の「舞媚娘」に、「眉心濃

黛直點、額角輕黄細安」(眉心の濃黛  
直に点じ、額角の輕黄 細く安らか  
なり)(『樂府詩集』卷七十三雜曲歌  
辞)とある。

帝は大いに喜んだ。

荷郡に着くと、帝は龍舟に乗り、妃の蕭妃は鳳舸  
に乗った。錦の帆と彩飾されたとも綱があり、贅沢を  
極めていた。

\*龍舟：宋・曾慥輯『類說』卷四に引く、

唐・杜宝の《大業雜記》船脚に、  
「隋煬帝江都に幸するに、洛口より龍  
舟を御す。高さ四十五尺、濶さ五十尺、  
長さ二百尺、分けて四重とし、上の一  
重には殿堂有り、次の一重には百六十  
房有り、下の二重には内侍及び船脚を  
安んず。船脚とは即ち水工の名なり」  
とある。

\*\*蕭妃：煬帝の後妃。煬帝が晋王の時王  
妃となる。梁明帝の娘。『隋書』卷三  
十六后妃伝に、「后性婉順、有智識、  
好学解属文、頗知占候」とある。

船の前は舞台となつていて、舞台の上には日よけの簾  
が垂れ下がっている。簾は蒲沢国(陝西省北部)から

献納されたもので、山を背負うほど巨大な蚊の睫毛の糸と蓮根の糸とで、小さな珠玉を通して、睫毛の間に編み込んであるため、朝日が強く照っても、光は差し込んでこなかった。船ごとにすらりと背が高く色の白い美女千人を選んで、彫刻を施した板に金をちりばめた楫を取らせ、それを「殿脚女」と呼んだ。

\* 殿脚女：唐・闕名撰『開河記』（『隋

煬帝開河記』）には、「于吳越間取民

間女年十五六歳者五百人、謂之殿脚

女。至于龍舟御、即每船用彩纜十

条、每条用殿脚女十人、嫩羊十口、

令殿脚女与羊相間而行、牽之。」十

五六歳の殿脚女を集めて船を引かせ

たことが描かれている。もともと、

隋煬帝の大きな船を引かせる船工を

殿脚といった。『隋書』卷二十四食

貨志に、「又造龍舟鳳番、黃龍赤艦、

樓艦、舫。募諸水工、謂之殿脚、衣

錦行履、執青絲纜挽船、以幸江

都。」煬帝の江都行幸の際、龍舟、

鳳番などの巨船を殿脚に引かせたこ

とが見える。

ある日、帝は鳳舸の上に登り、殿脚女の呉絳仙の肩に  
よりかかった。そのふくよかで美しいさまを喜んで、  
他の多くの女を寄せつけず、とても絳仙を可愛く思っ

て、いつまでも動かなかった。絳仙は長く美しい眉を  
描くのがうまかった。帝はこらえきれずに、車を回し  
て絳仙を呼び寄せ、齷好（帝の女御の称）の女官位  
を授けようとした。ちょうどその時絳仙は玉職人の  
万群に嫁いでいたため、それはかなわなかった。帝は  
寝てもさめても考えたあげく、龍舟の筆頭かじ取りに  
抜擢し、鋪竇夫人と名づけた。それ以来、殿脚女たち  
は争って長い描き眉をまねした。内宮の官吏は、毎日、  
螺子黛五斛を支給し、これを蛾縁と呼んだ。

\* 螺子黛：眉を引く顔料。六朝では眉を

綠色に染めることが流行し、その風は

隋唐においても衰えなかった。徐陵の

「雜曲」に、「綠黛紅顏兩相發、千嬌

百念情無歇」（綠黛紅顏 両つながら

相い発れ、千嬌百念 情歌くること

無し）（『樂府詩集』卷七十七雜曲歌

辭）とある。

螺子黛の産地はペルシャで、一個の値段が十金であつ  
た。後には賦税が不足して、銅黛を混ぜて支給するよ  
うになったが、絳仙だけはとぎれることなく螺子黛が  
与えられた。帝はいつも簾のかけから絳仙を見つめ、  
いつまでたってもそこを離れなかった。そんな時、役  
人の内謁者をふり返ってこういったことがある。

\* 内謁者：内侍省（宮廷内部の事を司

る）の属官。内外の伝達通報の事を扱

い、宦官が任用された。『隋書』卷二十八百官志下に、「内侍省、内侍、内常侍各二人、内給事四人、内謁者監六人、内寺伯二人、内謁者十二人。並用宦者。」とある。

昔から「秀色は餐うべきが若し」（美しい色つやの女は食いつきたいほどだ）（陸機「日出東南隅行」というが、絳仙はほんとうに飢えを癒してくれる。

そこで「持楫篇」（楫を持つ女）の歌を作って吟じ、絳仙に与えた。

旧曲 桃葉を歌うも

旧曲歌桃\*

葉

新粧は 落梅よりも艶なり

新粧艶

落梅\*

身を将つて 軽く楫に倚り

将身倚軽

楫

知る是れ 江を渡りて来るを

知是渡江

来

古歌で晋の王獻之は自分の愛妾である桃葉の美しさを歌っているが、目新しいそなたの粧いは梅の花よりも美しい。そなたの身体がしなやかに楫にもたれ

かかっているのを見て、ああ河を渡って来たのだなと分かる。

\* 桃葉：樂府の呉声曲辞の名。『隋書』

卷二十五行志上に、「陳時、江南盛歌王獻之。『桃葉』之詞曰『桃葉復桃葉、渡江不用楫……』陳の時、江南では盛んに王獻之の桃葉の歌が歌われたとある。『樂府詩集』卷四十五呉声曲辞桃葉歌に引く『古今樂録』に、「桃葉歌者、晋王子敬之所作也。

桃葉、子敬妾名。緣於篤愛、所以歌之。」桃葉は王獻之の愛人の名で、それを歌ったものがある。

\*\* 落梅：梅花模様の化粧。『太平御覽』

に引く『雜五行書』に、「宋武帝女寿陽公主、人日臥於含章殿簷下、梅花落留之、看得幾時、經三日、洗之乃落。宮女奇其異、竟效之。今梅花粧是也。」人日の日（正月七日）、ぼかばか陽気にうたた寝をしていた宋武帝の娘寿陽公主の額に梅の花が落ち、払っても取れず三日間そのままだったことから、宮女たちがまねをして梅花粧をしたとある（『太平御覽』卷三十時序



部人日引『雜五行書』。『唐五代傳奇集』に、「後世にいう花鈿、花子、眉子と同じ。種々の形に切り抜いた花模様を眉間に貼った。唐の李復言の『続玄怪録』定婚店に、『其眉間、常貼一花子、雖沐浴閑處、未嘗去。』とある。」という（中州古籍出版社一九九七年二三三頁）。

帝はこの歌を千人の殿脚女に歌わせた。

そうした頃、越溪（越、えつげい）から耀光綾（耀、よつこうりょう）というものが献上された。それは、綾の紋様が盛りあがっていて、光線の具合によって光彩を放つ織物だった。これは、越の人が順風に乗って、石帆山（石、せきはんざん）の下で舟を浮かべて、野生の繭を取り、糸繰りをしたことがあった。そのとき、夜に糸繰り女が見た夢の中に仙人が現れて、

\* 越溪：越国の美女西施が紗（うすぎぬ）

を洗った所。李白は五言古詩「西施」で、

「西施越溪女、出自苧蘿山。秀色掩今古、

荷花羞玉顔。……」（西施は越溪の女、

出自は苧蘿山。秀色は今古を掩い、荷の

花も玉顔に羞ず。……）と歌っている。

\* \* 石帆山：浙江省紹興の東にある山。山の

東北に、帆のように孤立した岩がある。

謝靈運の『遊名山志』に、「破石溪の南

二百餘里に、又石帆有り。脩廣と破石と度を等しくす。質色も亦た同じ。傳えて云う、古え人有りて破石の半を以て石帆を為ると。故に名づけて、彼を石帆と為す。」（『藝文類聚』卷八山部下石帆山引）とある。

禹穴は三千年に一度開かれる。お前が取った野繭は、江淹の詩文集の中の紙魚（しこみ）が姿を変えたものだ。その糸で着物をつくれれば、きっと奇妙な花紋があらわれよう。

と告げた。織ってみると、果たして夢の通りであったため、それを帝に献上したのであった。帝はその耀光綾を司花女の袁宝兒と殿脚女の呉絳仙にだけ与え、他の女には与えなかった。蕭妃がそのことを嫉んで喜ばなかつたため、二人は次第に帝の寵愛を受けることがなくなつた。

帝はいつも酔つていくつかの宮殿で遊んだが、たまたま宮婢の羅羅（らら）という女と遊んだ。羅羅は蕭妃を畏れて、帝をよう迎え入れず、月経（つき）で身体がすぐれないと断り、帝の側に寝ることをよしとしなかつた。そこで帝は、からかつて

箇人は無頼く 是れ横波 箇人無頼是横波

蛾

黛染めし隆き顛かしろに 小蛾むら簇むらがる 黛染隆顛簇小

幸いにして好く儂われを留とどむれば 伴に夢を成すに

儂おを留とどめず住あきて 意おもいは如何 不お留儂住意如何 幸好留儂伴成夢

そなたは可愛く流し目を送り、黛をひいた大きな額は、小さな蛾が群がっているかのよう。うまく行けば私をそこに留めて共に同じ夢をみるのに、私を留めないとはどんな気持ちなのだ。

\* 原文は「程姫之疾」：漢景帝の妃、程姫

が月経を理由に景帝の寢室に上がらなかつたことをいう。『史記』巻五十九五宗

世家と『漢書』巻五十三景十三王伝に、

「景帝召程姫、程姫有所避、不願進。」

とあり、顔師古は「月の事を謂うなり」と注している。

という詩を詠んだ。帝が広陵（揚州）に行つて以来、宮中に呉の方言をまねる者が多かつたため、「儂」という言葉を使ったのである。

帝は放心状態がゆゆしくなると、往々にして妖鬼に惑わされた。呉公宅の鶏けい台たいに遊あそんだ時、夢うつつのうちに陳後主と遇あつた。

\* 呉公台：劉宋の大明三年、沈慶之が竟陵

王誕を攻める時築いた台。弩台ともいう。のち、陳の呉明徹が広陵を攻める時に、ここを増築した。よつて呉公台という。

『隋書』巻四煬帝紀下によると、煬帝は宇文化及、司馬德戡などの反乱により五十歳で亡くなり、蕭后によつて埋葬されたが、右禦衛將軍の陳稜がこの呉公台の下に埋葬しなおしている。白居易の「隋堤柳」詩に、「土墳数尺 何処に葬れる、

呉公台下 悲風多し」とある。鶏台：

唐・趙洙は「広陵道」詩で、「鬪鶏台辺

花塵を照らし、煬帝陵下 水春を含

む」とうたい、唐・羅隱は「所思」詩で、

「梁王の兔苑 荊榛の裏、煬帝の鶏台

夢想の中」とうたっている。

後主は昔のように帝を「殿下」と呼んだ。後主は薄絹の黒い頭巾をかぶり、青いゆるやかな袖、長い裾の着物を着、縁の錦で縁取りした紫の紋がはいった四角い履くつをはいていた。舞女まいひめが数十人、左右に並んで付き従っていた。その中の一人は極めて美しく、帝はしきりにその女性を見た。すると後主が言った。

殿下はこの女ひとをご存じではないですか。張麗華です。桃葉山（六合県）の前を戦艦に乗つて麗華とともに北へ渡つたことをいつも思い出します。

あの時麗華が最も忘れられないのは、臨春閣にもたれて**東郭哽**（狡兔）の紫色の筆をためして、**衲紅綃**（絹布の用箋）の上に、尚書令江總の「**壁月**」の句に答える詩を書いていた時でした。まだ詩を書き終えないうちに、あの**韓擒虎**（隋の総管）が青白混毛の馬を躍らせ、数万の兵をひきいて一気に突撃して来ました。まったく礼儀を知らない奴で、おかげでとうとうこんな状態になってしまいました。

\* 東郭哽：すぐれた兔。漢・劉向『新序』

雜事第五に、「昔者、斉有良兔曰東郭哽、

蓋一旦而走五百里」とある。

\* \* **衲紅綃**：模様を圧印した赤色の絹、筆写

に用いる。衲紅箋：絵を圧印した赤色

の箋紙。『隋唐演義』第三十九回は、「那

時張麗華方在臨春閣上：写小衲紅箋、要

做答江令的壁月詩句、尚未及完、忽見韓

擒虎擁兵直入」、「**衲紅箋**」としている。

\* \* \* 江總：陳の尚書令江總。陳後主の側近で狎

客の一人。

壁月句：江總の壁月の詩、およびそれに

答えた詩は残っていない。『陳書』卷七後

主沈皇后伝史臣魏徵論に、「其曲有玉樹後

庭花、臨春樂等：其略曰、壁月夜夜滿、

瓊樹朝朝新。」とある。後主が諸貴人や女  
学士とともに、艶麗な新詩を賦したとき  
に、後主は「壁月夜夜滿」の句を作って  
いる。

そう言うと、緑色の紋がついた法螺貝に、紅い梁あわで  
醸成した新しい酒を注いで帝にすすめた。帝はそれを  
飲んでたいへん喜び、そこで麗華に「玉樹後庭花」の  
舞を舞うようにと頼んだ。麗華は、久しく舞っていない  
いうえに、井戸の中から出てきた後は、腰や手足が受  
け付けず、もはや昔の姿はありませんと固辞した。帝  
がそれでも再三にわたって求めると、ゆるやかに起ち  
上がって、一曲を舞いあげた。

後主は帝に、

蕭妃（煬帝の妃）はこのひとと比べていかがですか。

とたずねた。帝は、

春の蘭、秋の菊は、共にそれぞれの季節の美しい  
花だ。

と答えた。後主はまた十数篇の詩を作ったが、帝は心  
にとめず、「**小窗の詩**」と「侍兒の碧玉に寄する詩」だ  
けを気に入った。（後主の）「**小窗の詩**」にうたう。

驚

午醉ひて 醒め来たるや晚し 午醉醒来晚  
人無く 夢に自ら驚く 無人夢自

夕陽に 意有るが如し 夕陽如有意  
偏に傍りて 小窗を明らす 偏傍小窗明

昼間から酒をのんでいつの間にか寝てしまい日暮れ時に目覚めた。あたりは静まりかえって人は誰もいず、今見た夢に自分が驚いて目が覚めた。見ると、夕陽に心があるかのように、夕陽がわざと近寄って小窓を照らしている。

「碧玉に寄する詩」にうたう。

断 銷 散

離別は 腸の猶ほ断たれるがごとく 離別腸猶

相思は 骨の合に銷けるがごとし 相思骨合

愁魂は 飛散するが若くも 愁魂若飛

凭り仗って 一たび相い招かん 凭仗一相招

そなたとの離別を考えると腸がちぎれる思いがし、相い思うと骨がいまにも溶けそうになる。そなたの霊魂が遠くに飛び去っても、なんとかかしてもう一度わたしのもとへ呼びよせたいものだ。

張麗華は帝に拝礼して、一篇を求めた。帝はそれではきないと断わると、麗華は笑いながら言った。

此処に儂を留めざるも、 此処不留儂  
会ず儂を留むる処有り 会有留儂

処

いまここにわたしを受け入れてくれなくても きっとわたしを受け入れてくれるところがある。という帝の詩を、かつて聞いたことがございますのに、どうしてできないと仰るのですか。

帝は仕方なく、麗華のために次のような詩を作った。

事

面を見れば 多事無きも 見面無多

名を聞くこと爾許の時なりき 聞名爾許時

坐来生百媚 坐来 百媚を生じ 聞名爾許時

実箇の 好き相知なり 実箇好相

知

あなたの顔を見たところではべつに普通の人と変わりが無いが、あなたの名声は今までずいぶん久しく耳にしてきた。あなたは坐っているだけで艶めかく、まことにわたしのよき友人だ。

\* 百媚：宋・賀鑄の詞「点絳脣」に、「見面無多、坐來百媚生餘態。後庭春在。折取殘紅戴。 小小蘭舟、邊毆東風快。和愁載。纏絲難解。不似羅裙帶。」とある。

麗華は詩をおしただいたが、顔をしかめて喜ばなかった。後主は帝にたずねて言った。

龍舟での遊びは楽しいですか。始めは殿下の治世は堯舜の上をいくと思っておりましたが、今日では、このような遊びに耽っておられるとは。およそ人は誰でも、生まれたからには快樂を得ようとするものですが、むかしは、どうしてあのようにひどくわたくしをとがめたのですか。あの三十六の封書は、今でもわたくしを快々おっおうとして楽しませません。

\* 三十六封書：『南史』卷十陳本紀下に、

「隋文帝は晋王広（煬帝）を元帥にして八十の總管を統轄させて陳討伐を進めた。そして璽書（玉璽を押しした詔勅）を送って、陳後主の二十悪を暴き、さらに詔書を書き写して三十万枚複写して、あまねく江南の内外に広めた。」とあることをさす。陳後主の二十悪には、「宝衣玉食、窮奢極侈、淫声楽飲、俾昼作夜。斬直言

之客、滅無罪之家、剖人之肝、分人之血。欺天造惡、祭鬼求恩、歌蒐衛路、酣醉宮蓄。」などが連ねられていた（『隋書』卷二高祖紀下）。

帝は忽ちはつと我にかえり、

どうして今日なお、わたしを殿下とよぶのだ。また過ぎ去ったことをもちだしてわたしを責めるのだ。

と叱りつけると、その声とともにふうっと消えた。

## 大業拾遺記（隋遺録 卷下） 訳注

帝が月観宮におでましになったとき、ひととき景色が澄み渡って美しかった。夜中に起きて、蕭妃とふたりつきりで欄干の前に立った。簾れんざつ（すだれのかかったれんじ窓）は閉じており、侍臣は眠っていた。帝は蕭妃の肩にもたれかかり、自分が皇太子になった頃のことを語っていた。ちょうどその時若い宦官が薔薇のしげみに隠れて侍女をからかっていた。帝には薔薇

が巻きつき、笑い声がかくつくつと止まなかった。帝は腰つきが細くか弱いを見て、袁宝児が密通していると思つた。帝は単衣を羽織つて足早に近づき捉えたところ、それは侍女の雅娘だつた。

成灰

博山たきて思ひは夢を結ぶも 博山思結夢<sup>\*\*\*</sup>  
沈水 未だ灰に成らず 沈水未<sup>\*\*\*</sup>

＊月観宮：隋煬帝が行幸して泊まる、江都（揚州）での行宮。  
もどつて寢室に入ると、蕭妃は嘲笑つて笑い止まなかつた。帝はそこで言つた。

むかし自分で妥娘の所に出かけた時、有り様はちようどあのようだつた。この時は命すらも惜しくはなかつた。後に月實を得た時は、彼女にもつたいぶられたので、思う存分に満足することがなかつた。その時のわたしの愛憐の気持ちは、今日蕭娘（蕭妃）に対して抱く愛情に劣らなかつた。前に劉孝綽に倣つて「雜憶」の詩を作り、常にその詩をそなた（妃）に歌つて聞かせた。そなたは覚えてるか。

蕭妃は問われ、すぐに朗唱して言つた。

睡る時を憶う 憶<sup>\*\*\*</sup>睡時<sup>\*\*\*</sup>  
来たるを待つに剛か来たらず 待來剛不來  
装いを卸して仍も伴を索め 卸装仍索伴  
珮を解きて更に相催す 解珮更相催

待ちながら眠る時のことを思う。お前を待つてもなかなか来ない。化粧を落としてなおも相い方を求め、おび玉をとつて更にせきたてる。香炉の博山炉をたいしてお前を思つて夢の中に入るも、沈水香はいつまでも灰にならない。

＊劉孝綽：梁の沈約、任昉らに推賞される。  
昭明太子蕭統に重んぜられ、殷芸、王<sup>陸</sup>、陸<sup>顯</sup>らの文学士と交わる。『隋書』経籍志に、「梁廷尉卿劉孝標集十四卷」とある。『梁書』卷三十三に伝がある。  
＊憶睡時：次の「憶起時」の句とともに、梁・沈約の「六憶詩」四首に倣つたもの。その詩は『玉台新詠』卷五に、「憶來時的の上階<sup>詢</sup>。勤勤聚離別、慊慊道相思。相看常不足、相見乃忘飢。」「憶坐時。點點羅帳前。或歌四五曲、或弄兩三絃。笑時應無比、嗔時更可憐。」「憶食時。……」「憶眠時。……」とみえる。煬帝が自ら倣つたという劉孝綽の詩に「雜憶詩」はない。  
\*\*\*博山炉：古代の香を焚く器具。蓋に山を重ね獸が走る姿を彫る。漢魏に多い。図は「文博芸苑」

(<http://www.hnet.com.cn/wby/>)によ

\*\*\*沈水：香木の沈香のこと。芯の堅い部

分が水に沈む。沈水香ともいう。』玉

台新詠』卷十近代西曲歌楊叛児に、

「歡作沈水香，儂作博山爐。」（歡（あ

なた）は沈水香を作り、儂（わたし）

は博山爐を作る）とある。

また言った。

起きる時を憶う

投籤初めて暁を報す

被に惹かるる香黛の残り

枕に隠れし金釵劇ふ

笑いは動く上林の中

除却す 司晨の鳥

憶起時

\* 投籤初報暁

被惹香黛残

枕隠金釵劇

笑動上林中

除却司晨鳥

朝起きる時のことを思う。時を報せる投籤が鳴って  
夜明けを告げる。褥しとねに眉墨の香りが残り、（笑い  
のために）枕の下に隠れた金の簪かんざしが絶えず揺れ



動きつづける。笑い声が苑庭の中全体に響きわたり、  
夜明けを告げる鳥がびっくりして飛び去ってしまう。

\* 投籤：夜間に時を報せる竹のふだ。更籤、  
更籌ともいう。

帝はこれを聞いて、溜め息をつきながら言った。

月日のたつのは早いもの。今ではもう数年前のこ  
とだ。

蕭妃は言った。

外では群盗が多いと聞きますが、幸いにして帝が  
それをお鎮めになろうとされています。

帝は言った。

わしは内うちの事はすべて楊素\*に任せてある。人  
は生まれてどのくらい生きられるというのか。た  
とえ他ならぬ異変があったとしても、わしは長城  
公なんぞに成り下がりにはせぬ。そなたは宮廷外の  
事を申すでないぞ。

\* 楊素：字は処道。弘農華陰（陝西省）  
の人。陳討伐に功績があり、煬帝の重  
臣として司徒、楚国公となる。大業二

年（606）卒。『隋書』経籍志に、  
「大尉楊素集十卷」とあり、卷四十八  
に楊素伝がある。『四庫全書総目提要』  
卷一百四十三は、煬帝が月観宮に行幸  
したこの時（大業十二年以降）、楊素は  
死去して久しかった、と指摘している。

帝が以前に梁の昭明太子蕭統の文選楼<sup>\*</sup>に行幸され  
たとき、車が到着する前に、先に宮女数千人に命じて  
楼に上って出迎えさせた。かすかな風が東から吹き寄  
せ、宮女の衣が風にしなやかに翻り、じかに肩と項<sup>うなじ</sup>  
にかかった。帝はそれを見て、女色にのめり込むこと  
にますます火がついた。そこで迷楼<sup>\*</sup>を建て、田舎の  
少女を選んで住ませ、薄い絹の単衣の裳<sup>したばかま</sup>を着せ  
て、欄干にもたれて眺めさせると、その姿は風に乗っ  
て舞い上がるかの勢い。また名高いお香を四隅で焚け  
ば、煙気が漂い、常時朝霧が晴れないかのごとくで、  
神仙境と称してもまだ足りないくらいであった。楼上  
には四張りの宝帳を張り、宝帳はそれぞれ異なる名を  
つけ、一つは散春愁（春の愁いを散ず）といい、二つ  
は酔忘帰（酔いて帰るを忘る）といい、三つは夜酣香  
（夜酣の香り）、四つは延秋月（秋月を延（まね）く）  
といった。化粧道具や寝巻きは、宝帳ごとにそれぞれ  
造りが違った。

\* 文選楼：梁の昭明太子蕭統の遺跡。文

選楼の遺跡は四力所ある。襄陽（湖北  
省）、池州（安徽省貴池）、揚州（江蘇  
省）、江陰（江蘇省）。『江陰志』は、  
「文選楼は顧山寺にある。古く楼は七  
棟あり、楼の前に山茶一株があり、昭  
明太子の手によつて植えられたと伝わ  
っている。」という。一九八〇年十月  
の『光明日報』第三版に、江陰顧山公  
社の文選楼の前に小豆がある、実地に  
調査したところ、文選楼の遺跡はずで  
ないが、八十歳の老人が覚えてい  
て指で示した旧跡はそこだった、と記  
載している。隋煬帝が訪れた文選楼は、  
揚州の文選楼。

\*\* 迷楼：隋煬帝が建てた楼閣。唐、闕名  
撰『隋煬帝迷楼記』には、煬帝は晩年  
女色に沈迷し、役夫数万を動員して、  
楼閣高下、軒窓掩映、幽房曲室、玉欄  
朱楯、互相連属、回環四合、曲屋自通  
の楼閣を一年で完成。誤つてそこに入  
ると終日脱出できず、帝は喜んで、  
「真仙をその中に遊ばしむるも、また  
まさに自から迷うべきなり。これを目  
して迷楼というべし。」と言ったこと  
から、迷楼といわれたことが描かれて



いる。

帝は広陵（揚州）に行つて以来、酒色におぼれて度を失い、眠るたびに必ず手足が揺れ動いたり、或いは歌声やさまざまな楽器が一斉に鳴つて、それを聞いてようやく夢路にはいるありさまだつた。侍女の韓俊娥かんしゅんがが特に帝に気に入られた。帝はいつも寝む時は呼びよせて、四肢を揺り動かすことを命じ、その後には眠りについたので、特に「来夢児」という名を授けた。蕭妃が密かに韓俊娥にたずねたことがある。

帝はお身体の具合が悪いようだけれど、お前が安らかにすることができるのは、特別な媚態の術があるのかい。

韓俊娥は畏れかしこまり、言った。

わたくしは帝に付き従い都から参りましたが、帝はいつも何妥の車に乗つておられるのを見ました。車道は高低が不揃いで、女性の体が自然と揺れまです。帝は揺れる体に寄り添つてお喜びでした。わたくしは今幸いにもお妃さまの恩徳をこうむり、帳の下で帝の寝臥に侍つておりますが、わたくしなりに車の中の様子に倣つて帝を安らかにしてさしあげているだけで、特別な媚態の術はございません。

後日、蕭妃は韓俊娥を罪におとし入れて追い出したが、帝はそれを止めることはできなかった。暇なある日、迷楼に登つて彼女を思い、二篇の詩を詠んで東南の柱に書きしるした。

黯黯として愁い骨を侵しおか 黯黯愁侵骨  
綿綿として病い成らんと欲す 綿綿病欲成  
須すべからく知るべし 潘岳の鬢 須知潘岳鬢  
強半は多情たりと 強半為多情

（韓俊娥のことを思うと）暗澹として愁いが骨をも侵し、綿々と続いて病気になるばかり。潘岳の髪が白髪になつたわけは、彼が多情であつたからだと思ひ知るべきなのだ。

\* 潘岳の鬢：晋・潘岳は「秋興賦」序で、「余は春秋三十有二、始めて二毛を見る」（『文選』卷十三）という。二毛は、頭髮に白髪が混じること。また、その「秋興賦」で、「斑鬢影（た）れて以て弁（かんむり）を承け、素髪颯（さつ）として以て領（えり）に垂る」まだらな髪は冠を載せ、白髪はえり首に垂れている、と言っていることから、壮年の白髪を潘岳鬢という。

信まことならずや長く相い憶うは

不信長相

絲は鬢うちよの里うちよ従り生ず

絲従鬢里

閑来 楼に倚りて立てば

閑

来倚楼立

相い望むがごとく幾ほとんど情を含めり

相望幾含

情

(韓俊娥のことを)長く思い続けていたのは本当だった、白い糸が鬢の間から生えてきたのだから。ひまな時間しずかに迷楼に寄りかかって立てば、互いに見つめ合うかのようで深い感慨を抱く。

殿脚女たちが広陵に着いた後は、全員を月観宮に迎え入れたので、呉絳仙なども、したしく帝の寝殿に付き従うことはできなくなった。ある郎将\*かしゅうが、瓜州\*かじゅうから帝の命令を伝えた後に戻ってきて、合歡ごうかんの果物、一器を献上した。帝は若い宦官に命じて馬を走らせ、一对の果物を呉絳仙に授けたが、馬が疾駆して揺れたために、果物はばらばらになってしまった。絳仙は賜り物をおしいただと、紅い箋紙\*せんしに一筆したためて帝にささげた。

\*瓜州：今の江蘇省揚州の西南、長江の

北岸に位置する。『読史方輿紀要』巻二

十三揚州府江都県瓜洲城に、「府の南四

十里の江浜。昔は瓜州村という。揚子

江の砂が堆積。砂が長く瓜の字状にな

っている。揚子江口に連接し、人が住

む。」とある。

\* \* 紅箋：紅色の箋紙。詩詞を書いたり名

駅騎 双果を伝えて

駅騎伝双

果

君王の寵念深し

君王寵念深

寧いずくんぞ知らん 帝の里もとを辞して

寧知辞帝

里

復たは合歡の心無きことを

無復合歡

心

駅馬が双つの果物を運んでくれて、帝が私を思ってくださる愛の深さを知りました。でもどうして、私の心は帝のものを離れてしまい、二度と歡びをともにする気持ちはないことをご存じないのでしょうか。

帝は詩句を見て喜ばず、使いの宦官を顧みて言った。

絳仙はどうしたのだ。どうして恨み深いことばをよこしたのだ。

宦官は驚き恐れ、お辞儀をして言った。

あたかも騎馬で揺れましたために、月観宮に着いたときには、果物はすでに分離し、もとの連理の状態には戻りませんでした。

帝は意味が分からず、こう言った。

絳仙はただ容姿が美しいだけでなく、詩の趣きがおく深く、女司馬相如だ。また、左貴嬪にも劣らない。

\* 左貴嬪：西晋左思の妹、左芬のこと。好字でよく文を綴り武帝の貴嬪となった。『晋書』卷三十一后妃列伝上に、「武帝は左芬の詞藻を重んじ、地方の名産や珍宝があるたび、必ずそれを称美する文を作らせ、そのために帝の恩賜をうけることが頻繁にあつた」とある。

帝が宮中において小さな宴を催したとき、拆字令の遊びをして、漢字の左右離合の意味を考えさせた。

\* 拆字：字を偏・旁・冠・脚などに分解して、その意味で吉凶を占ったりすること。拆字令：酒宴の席で文字を分解

その時杳娘が側に付き従っていて、帝は、

余は「杳」の字を分けて「十八日」としよう。

と言った。すると杳娘は「羅」の字を分解して「四維」とした。帝は蕭妃をふり返り、

そなたは朕の字を分解することができるか。できねば一杯の酒を飲まねばならぬぞ。

と言うと、妃はおもむるに、

左を移して右に置いて書けば、なんと「淵」の字になるではないですか。

\* 淵字：唐の高祖李淵の名。『隋書』卷二十二五行志上には、字を離合して世の興亡を占ったことが多く見える。「煬帝が即位して年号を大業とすると、識者

してなぞをかける遊び。令官の役を選び、できない者やきまりを犯した者には罰則を与えたりする。例えば、「肉」を「内中人」、「三」を「眠川」、また唐の高祖「李」淵の出現を予言して「木子当天下」（唐・張讀撰『宣室志』）など。

がそれを憎み、『字に於いて離合すれば、  
「大苦未」となる』と言った。まもな  
く天下は乱れ、国土は塗炭の苦しみに  
覆われた」とある。淵の字は、李淵に  
取って替わられることを予測したもの。

と言った。時に人望は、多くが唐公（李淵）に向かっ  
ていたため、帝はこれを聞いて喜ばず、こう言った。

余はそんな事は知らぬぞ、どうして「聖人」とな  
らぬことがあるものか。

かくして宮廷の内には奸臣が台頭し、外からは盜賊  
が攻めこむようになった。直閤の裴虔通と虎賁郎將  
の司馬德勤などが、左右屯衛將軍の宇文文化及を引き  
入れて反乱を謀ろうとしていた。そこで官奴に休暇を  
与えて、宿直を交替制にしたいと願い出た。帝は臣下  
の奏上を受け入れて、次のような詔を發した。

\* 奸臣、盜賊：『隋書』卷四煬帝紀下には  
「拳兵作乱、称皇帝」、「拳兵反、自称天  
子」、「聚衆数万為羣盜」、「拳兵為盜、衆  
数万」などの記述が頻出し、宮廷の内  
外で反乱が頻発したことが分かる。

\*\* 裴虔通、司馬德勤、宇文文化及：『隋書』  
卷四煬帝紀下に、「義寧二年三月、右屯

衛將軍宇文文化及、武賁郎將司馬德戡、  
元礼、監門直閤裴虔通・・・等が、勇  
猛果敢の士を集めて乱を起こし、宮中  
の奥殿まで進攻した。帝は温室にて崩  
御し、時に五十歳であった。蕭皇后は  
宮人に命じて寢台を撤収して棺を造り  
埋葬させた。」とある。宇文文化及は、司  
馬德戡を温国公に封じた後、縊殺し、  
皇帝位について国を許と号し、裴虔通  
を誘国公とし、その後竇建德（とうけ  
んとく）に斬殺される。裴虔通は唐に  
帰属したが、隋朝で殺逆を犯した罪で  
除名され、嶺外の地で死んだ。司馬德  
勤は、『隋書』には司馬德戡のこととし  
て見える。なお、明代小説の『醒世恒  
言』第二十四卷隋煬帝逸遊召讎は司馬  
德戡とし、『隋煬帝艷史』第三十八回、  
『隋唐演義』第二十一節は、司馬德勤  
としている。

百僚各位。寒暑は交代して巡り来るゆえ、一年の  
時序が成り立つ。日月は代わるがわる明るくなる  
ゆえ、労苦と安逸の均衡がとれる。ゆえに士子  
（読書人）にはくつろいで憩う歓談というものが  
あり、農夫には仕事を休む時節というものがある。

ああ、お前たち官奴よ、労役に精勤し、怠りなくよく勤めた。爪や髪には垢や埃がたまり、兜には虱が湧くまでになっている。朕は甚だ気の毒に思う。この際お前たちに交代で休ませよう。ああ。そのむかし東方朔が滑稽をもって求めたようなことに煩わされず、(宮廷の)衛士の上奏文に従おう。(こうすれば)朕は侍従の者に対して恩徳を施したことになるといえよう。以上の趣旨に従うべし。

かくて焚草<sup>\*<sub>1</sub></sup>の変が起こった。

\* 東方朔の滑稽な求め：『漢書』巻六十五

東方朔伝に次のような話がある。「漢武

帝の時、東方朔は俸禄が薄く謁見する

こともできなかった。そこで、従僕の

侏儒(こびと)をおどして、武帝はお

前たちが役立たずでいたずらに衣食を

求めているだけなので全員を殺そうと

している、と嘘を言った。侏儒たちは

恐れて泣いて、武帝が通りかかったと

きに号泣しながら叩頭して詫びた。武

帝は東方朔のしわざだと知って、東方

朔をただしたところ、東方朔は、侏儒

は身長が三尺余りで俸禄は穀物一袋と

銭二百四十です。私は身長が九尺余り

で俸禄が同じく穀物一袋と銭二百四十  
です。侏儒はたらふく食べて死にそう  
ですが、私は飢えて死にそうです。と  
言った。武帝は大笑いして金馬門で詔  
命を待たせ、東方朔はしだいに武帝の  
親近を得るようになった。」と。

\* 焚草の変：『隋書』巻八十五宇文化及伝

に、義寧二年三月一日、宇文化及と司

馬德戡、裴虔通等は勇猛な士を率いて

謀反を起こし、「真夜中になると、司馬

德戡は東の城内に数万人の兵を集めて

火を放ち、城外と呼応した。煬帝はそ

の声を聞いて、何事かとたずねると、

裴虔通は偽って、草萐きの作業場が火

事となり、城外の人が消火にあたって

おります。だからやかましいのです。

と言った。」帝はそれを真に受けて遂に

宮中で殺された、とある。この兵乱を

焚草の変という。

## 大業拾遺記(隋遺録) 跋 訳注

【跋】『説郭』 炳 一百十収 『大業拾遺記』。『百川学海』 庚集、

乙集収 『隋遺録』。『香艶叢書』。『紅袖添香室叢書』、

『宮或遺事』、『筆記小説大観五編』 収 『大業拾遺

記』。魯迅校録 『唐宋伝奇集』 収 『隋遺録』。

右の『大業拾遺記』とは、上元県は南朝の古都で、そこに梁のとき瓦棺寺の閣を建てたことにはじまる。閣の南隅には二部屋があり、そこを閉めたまま歲月が経ちいつのまにか忘れられていた。唐（武宗）の会昌中（八四一〜八四六年）に仏寺を拆毀せよとの詔書が発布されたので、二部屋が開けられた。すると、約千余りの荀筆の書が見つかり、中に一帙の書があった。その多くはどれも損壊していたが、文字で値打ちがあるものは、『隋書』の下書きだった。その中に生の白藤紙の軸が数幅あつて、『南部烟花録』と題されていた。僧の志徹がそれを手に入れた。種々の仏典が焚もやされることになり、僧侶たちはその珍貴な軸を惜しみ、躍起になつて紙面の末尾を開いた。軸をよく見ると、どれにも「魯郡文忠顔公」（顔真卿）の名があり、自らこれを書き写したと題署されていた。この書きものが前の荀筆であることは、明白に知られた。志徹がこの昔のことを記したものを手にいれて、『隋書』と比べてみることに及んだところ、多くは隠語で、特にこじつけ

があり、事柄が相当脱落していた。国初の文武百官は争つて王道を輔政したから、顔公（顔真卿）は華麗奢靡な以前の事迹を良しとせず、だから削除したのである。今堯風\*\*\*が回復し、天子は有徳の車に乗っている時世である。ただただ、この書が滅んでしまつて、文人才子の話の種とならないのは惜しまれる。だから編纂して『大業拾遺記』とした。本文の欠落はおよそ七八割あるが、それをすべて『隋書』によつて補つた。

\* 唐の武宗は会昌五年八月に「仏寺を毀し勅しいて僧尼を還俗せしむ制」を發して、天下の寺院四千六百余所を壊し、男女の僧侶二十六万五百人を還俗させ、招提、蘭若四万余所を壊させた。これは中国仏教史上に四度にわたつて行われた「三武一宗」の法難の一つである。三武とは、北魏の大武帝、北周の武帝、唐の武宗で、一宗とは、後周の世宗をいう。

\* \* 魯迅及び『百川学海』 収 『隋遺録』、  
『宮或遺事』 収 『大業拾遺記』は、「荀筆」とするが、『説郭』 炳 百十収 『大業拾遺記』、『香艶叢書』 収 『大業拾遺記』、『紅袖添香室叢書』 収 『大業拾遺記』、『筆記小説大観』 五編収 『大業拾遺記』は、「荀筆」とする。また、南

宋・周南撰『山房集』巻五、宋・闕名撰『五色線』巻下も「筍筆」とし、宋・晁公武撰『郡齋讀書志』巻二上雜史類も、「南部烟花録』一卷…僧志徹得之于官閣筍筆中」とし、宋・孔伝撰『統六帖』（『唐宋白孔六帖』巻十四筆硯十六）も、「瓦官筍筆」（瓦棺寺の筍筆）と題してこの跋文を引き、いずれも「筍筆」とする。筍筆とは、たけのこ筍形の穂先の筆のことをいう。

\*\*\*「魯郡文忠顔公」は、宋・闕名撰『五色線』巻下「瓦棺筍筆」と宋・孔伝撰『統六帖』「瓦棺筍筆」とは「魯郡顔公」としてあり「文忠」二字が脱落している。「五色線」の「瓦棺筍筆」の一文を訳して紹介した小南一郎は、「魯郡顔公」を「顔師古」とみなしているが（『魯迅全集』第十二巻、一八〇頁、学習研究社）、『五色線』と『白孔六帖』は文を要約して採録してあることから、両書の「魯郡顔公」は「魯郡文忠顔公」つまり顔真卿と考えるのが自然であろう。

\*\*\*堯風：古代の堯帝の時は、帝の徳が高くて、よく教化が行われ、世の中は太

平で栄えた。李剣国は、これを晚唐宣宗の大中年間のことと比定する（前掲書五六〇頁）。

## 無名氏の跋文について

この跋文に関しては、次の章で『山房集』の訳を示すように、南宋・周南撰『山房集』に採録するものには、『説郭』や『百川学海』に伝わる跋文の遺漏を補う所がある。

それは「志徹因将隋書草藁示予、遂得録前事」の九字で、志徹がこの『隋書』の草藁（下書き）を予（わたし）に見せてくれたことをいう。つまりは、この「予」が、もと『南部烟花録』と題された残片を『隋書』によって補い『大業拾遺記』を編纂したことになる。従って、この跋文の前に展開される作品の名は『隋遺録』ではなくて『大業拾遺記』であることがふさわしく、またこの『大業拾遺記』の著者は跋を書いた「予」ということになる。この「予」が名を騙つて顔師古としたために『大業拾遺記』の著者は顔師古となつて伝わったという次第であろう。

従って、この「予」は、僧の志徹と同じく唐武宗の会

昌中（八四一〜八四六年）の人で、しかも「今堯風已還、德車斯駕」の世にいた人ということになる。この、堯風が回復した有徳の天子の時代が、李劒国がいうように武宗の次の天子、宣宗の大中年間（八四七〜八五九年）であるならば、『大業拾遺記』が書かれたのは晩唐の大中年間かそれより後のことになる。従って、陳末から隋を経て初唐の貞觀十九年（六四五年）に六十五歳で病卒した顔師古が著者であることはありえないし、その上にまた、『宋史』巻二百三芸文志正史類に「顔師古 隋書八十五卷」とあるように、『漢書』一百卷顔師古注以外に、『隋書』八十五巻をも著した顔師古が、『隋の史実としては越王凝であるべきところを』大業拾遺記』で越王侑としたり、何稠と何妥の車を混同したり、死去後十年以上経過している楊素を登場させた

りするようなことは考えられない。  
以下に、『山房集』輯録の跋の訳を示す。

### 『山房集』輯録 跋 訳

【又題】南宋・周南撰『山房集』卷五南部烟花録

上元県は南朝の古都で、そこに梁のとき瓦棺閣を建てたことにはじまる。閣の南隅には二つの籠があり、それを閉じたまま歳月が経ちいつのまにか忘れられてい

た。唐（武宗）の会昌の年（八四一〜八四六年）に仏寺を拆毀せよとの詔書が發布されて、二つの籠が開けられた。すると、約千余りの筭筆の書が見つかり、中に一帙の書があつた。どれもかなり損壊していたが、文字で値打ちがあるものは、『隋書』の下書きだった。白藤紙の軸が数幅あつて、『南部烟花録』と題されていた。僧の志徹がそれを手に入れた。仏典が焚もされることになり、僧侶たちは珍貴な軸を惜しみ、躍起になつてそれを取り、文字を見開いた。軸をよく見ると、どれにも「魯郡文忠顔公」（顔真卿）の名があり、自らこれを書き写したと題署されていた。この書きものが前の筭筆であることは、明白に知られた。志徹がこの『隋書』の下書きをわたしに見せてくれたので、ついに、この昔のことを記した書きものを手にいれ、『隋書』と比べることに及んだところ、多くは隠れて文をなさず、時にはこじつけがあり、事柄が相当脱落していた。国初の文武百官は争つて王道を輔政したから、黄門の顔公（顔真卿）は筆で以前の事迹をおごつて書きたいとは思わず、だから削除したのだろう。今堯風が回復し、天子は有徳の車に乗っている時世である。ただただ、このことが埋もれてしまつて、文人才子の話の種とならないのは惜しまれる。だから『大業拾遺記』を編纂した。もとの字の欠落は六、七割あるが、それをすべて『隋書』によつて補つた。



## 魯迅校録『唐宋伝奇集』収

### 『隋遺録』について

魯迅は『唐宋伝奇集』の「序例」と「稗辺小綴」において、唐宋の伝奇の作品を集めるに際しては、「通行の諸本にくらべて、いささかなりとも信頼できるものにして」と考え、「別の書物に重複してみえるものや、ちがった版本があつて互いに校勘できるものは、相互に校勘を行い、字句に異同がある場合は、正しいものに従つた。」と校勘の姿勢を述べ、『隋遺録』は「明鈔本の原本『説郭』一百巻の巻七十八」から録出して、「明翻刻の宋本『百川学海』」によつて校勘したと述べている。私はこのたびの調査のなかで、魯迅が扱つたという「明鈔本の原本『説郭』一百巻」本ではなく、明鈔本『説郭』一百巻に据つた涵芬楼蔵板によつて校勘をしたが、その際に気づいたことを以下に記しておく。

また、前野直彬は魯迅の『唐宋伝奇集』と『古小説鉤沈』について、驚くべき綿密さと正確さをもつた非常に周到な作業だが、現在の目から見れば、校訂しなおさなければならぬ部分が少なくないと指摘しているが、

一方では、近年大陸で出版された『唐五代伝奇集』（李格非、吳志達主編、中州古籍出版社、一九九七年）は魯迅校録『唐宋伝奇集』本を底本として、『隋遺録』に注釈を施しているように、その扱いに濃淡があるのが現状であることを付記しておく。

#### 【巻上】

(一) 「留借」(校勘番号1 以下番号のみを記す)

魯迅校録『唐宋伝奇集』は「留借」とする。「説郭」巻七十八をもとにして『百川学海』で校勘したという魯迅は、『説郭』巻七十八の「留借」をとらず、「留借」としたようだが、ここでは「留借」「留借」ともに意味が通らない。『百川学海』諸本にみえる「留借」とすべき。宮女が車にとりすがつて、心をこめて惜しんだ、という意味であろう。

(二) 「飛白」(2, 3)

魯迅は「以帛」とする。「以」字は魯迅以外に「以」とする版本はない。伝わる版本(後述の文献リストと校勘表を参照)はすべて「飛」であり、『太平御覧』巻七百四十九引【大業拾遺】も「飛」とする。また「帛」字は、『説郭』巻七八と、『百川学海』諸本が、いずれも「帛」としていることから、魯迅はこれに従つたようだ。しかし、『説郭』**炳**一百十および『香艷叢書』等四

種の『大業拾遺記』は「白」としており、前の一字「飛」につづく語としては「白」の方がよい。「飛白」は墨の色がかすれた書体をいう。唐・張懷瓘の『書断』巻上に、「飛白者、後漢左中郎將蔡邕所作也。王隱、王羣並云、飛白變楷製也。本是宮殿題署、勢既徑丈、字宜輕微不滿、名爲飛白。」とある。

(三)「車」(8)

魯迅は「牛車」とするが、伝わる版本はすべて「車」一字のみ。

(四)「香氣」(11)

魯迅は「香」一字とするが、伝わる版本はすべて「香」の下に「氣」の字があり、「香氣」二字とする。

(五)「蒲澤國」(18)

「蒲澤國」の「澤」字を、魯迅は「擇」とするが、伝わる版本はすべて「澤」。地名としても「蒲澤」はあるが「蒲擇」は無い。『漢書』卷二十八下地理志に、「五原郡…隰十六。九原、固陵、五原、臨沃、文国、河陰、**鳶澤**…」とあり、『旧五代史』卷八十三晋書九少帝紀に、「是月、契丹耶律德光與趙延壽領全軍入寇、圍恆州、分兵陷鼓城、**樽城**、元氏、高邑、昭慶、寧晉、蒲澤、欒城、柏鄉等縣。」とある。

(六)「蛟」(19)

魯迅は「蛟」とするが、伝わる版本はすべて「蛟」である。「蛟」であれば、「山を背負うほど巨大な蛟」となり甚だ興趣にとむところだが、「山を背負うほど巨大な蛟」が原作のすがたである。

(七)「妙麗」(20)

魯迅は「妍麗」とするが、伝わる版本はすべて「妙麗」とする。また、『詩話総龜』前集卷十八収【大業拾遺】も「妙麗」である。

(八)「野繭」(22)

魯迅は「繭」一字とするが、伝わる版本はすべて「野繭」二字。ただし、『詩話総龜』前集卷十八収【大業拾遺】は「繭」一字である。

(九)「程姫」(23)

魯迅は「程妃」とするが、伝わる版本はすべて「程姫」とする。また、『詩話総龜』前集卷十八収【大業拾遺】も「程姫」である。「程姫」は漢景帝の妃で、月経を理由に景帝の寢室に入らなかつたことが、『史記』卷五十九五宗世家と『漢書』卷五十三景十三王伝にみえる。

(十)「午睡」(28)

魯迅は「午睡」とするが、伝わる版本はすべて「午醉」とする。また、『類説』卷六収【南部烟花記】、『詩話総龜』前集卷十八収【大業拾遺】、『詩紀』卷一百八小**幕**詩、『漢魏六朝一百三家

集』小纂詩、『全唐詩』卷七百七十五失題詩、『漢魏六朝名家集』小窓詩も「午醉」である。ちなみに明代小説の『醒世恒言』第二十四卷隋煬帝逸遊召讎は、「醉」とし、『隋煬帝艷史』第三十八回は「睡」とする。

(十一)「愁魂」(30)

魯迅は「愁雲」とするが、伝わる版本はすべて「愁魂」とする。また、『類説』巻六収「南部烟花記」、『詩話総龜』前集巻十八収「大業拾遺」、『漢魏六朝一百三家集』寄碧玉詩、『漢魏六朝名家集』寄碧玉詩も「愁魂」である。ちなみに『醒世恒言』第二十四卷隋煬帝逸遊召讎も、「愁魂」とし、『隋煬帝艷史』第三十八回も「愁魂」とする。

(十二)「爾許」(32)

魯迅は「亦許」とするが、伝わる版本はすべて「爾許」とする。また、『詩話総龜』前集巻十八収「大業拾遺」も「爾許」である。「亦許」では意味が通らない。ここは諸本が伝えるごとく「爾許」がよく、「かくばかり、このような」という意味となる。ちなみに『醒世恒言』第二十四卷隋煬帝逸遊召讎も、「爾許」とし、『隋煬帝艷史』第三十八回も「爾許」とする。

(十三)「名」(39、40、41)

魯迅は「二曰…」「三曰…」「四曰…」といずれも「曰」とするが、伝わる版本はすべて「二名…」「三名…」「四名…」とする。この直前に「一名…」とあることから、「名」の方がよい。

(十四)「令」(42)

魯迅は「命」とするが、伝わる版本はすべて「令」とする。

(十五)「體」(44)

魯迅は「常」とするが、伝わる版本はすべて「體」とする。

(十六)「因附」(45)

魯迅には「因」の字なく「附」一字のみだが、伝わる版本はすべて「因附」二字とする。

(十七)「攻」(46)

魯迅は「生」とするが、伝わる版本はすべて「攻」とする。

(十八)「直」(47)

魯迅は「値」とするが、伝わる版本はすべて「直」とする。『隋書』巻四煬帝紀下に、「義寧二年三月、右屯衛將軍宇文化及、武賁郎將司馬德戡、元礼、監門直閣裴虔通等、以驍果作乱、入犯宮或」とあり「直閣」とするのがよかるう。ちなみに明代小説の『醒世恒言』第二十四卷隋煬帝逸遊召讎は、「値」とし、『隋煬帝艷史』第三十

【巻下】

八回と、『隋唐演義』第二十一節は「直」として  
いる。

以上から判断すれば、魯迅は基本的には『説郭』巻七  
十八の【隋遺録】に拠り、『百川学海』を参考にして校  
勘をしているが、厳密にそれを守ったとはいえないよ  
うだ。もちろん、文献学上適切な校定をしたと考えら  
れるところがあるが（「泊肩」を「拍肩」、「櫛肩」を  
「瞎肩」と校定）、いずれの版本にも拠らずに独自の判  
断で校定したと推測されるところがある。しかもそれ  
らの箇所は、そうすることによって却って文意がそこ  
なわれており、『説郭』や『百川学海』の本文に拠るべ  
きところであったといえる。

この判断はしかし、『説郭』と『百川学海』の版本の  
問題を含むので、以下に示すこのたびの調査対象文献  
資料から判断したもの、という但し書きがつく。また、  
『唐宋伝奇集』の中の【隋遺録】一篇を調査した範囲  
内で、という但し書きがつく。

以上を検討する際に参照した文献を以下に掲げてお  
く。

『説郭』巻七十八収【隋遺録】（据明鈔本『説郭』一百  
卷。涵芬楼藏板『説郭三種』、上海古籍出版社、  
一九八八年、上海）

- 『説郭』**炳**一百十収【大業拾遺記】（同右）  
『百川学海』庚集収【隋遺録】（摸宋咸淳本『百川学  
海』、中文出版社、一九七九年、京都）  
『百川学海』庚集収【隋遺録】（影宋本『百川学海』十  
集、新興書局、一九六九年、台北）  
『百川学海』庚集収【隋遺録】（『百川学海』、海王邨古  
籍叢刊、中国書店、一九九〇年、北京）  
『百川学海』乙集収【隋遺録】（重刊『百川学海』、筑  
波大学所蔵）  
『歷代小史』巻之九収【隋遺録】（明・李**开**輯。江蘇広  
陵古籍刻印社、一九八九年、揚州）  
『香艷叢書』収【大業拾遺記】（民国三年上海中国図書  
公司和記印行本複製『香艷叢書』、上海書店、一九  
九一年、上海）  
『紅袖添香室叢書』収【大業拾遺記】（民国二十五年、  
上海羣学社排印本）  
『宮或遺事』収【大業拾遺記】（**缶**古書店、一九三六年、  
上海）  
『筆記小説大観五編』収【大業拾遺記】（民国六十三年、  
新興書局景印本、台北）  
『類説』巻六収【南部烟花記】（四庫筆記小説叢書、上  
海古籍出版社、一九九三年、上海）  
『太平御覧』巻七百四十九引【大業拾遺】（民国六十四  
年、平平出版社景印本、台南）  
『詩話総龜』前集巻十八引【大業拾遺】（人民文学出版

社、一九九八年、北京)

『詩紀』卷一百八收「小纂詩」、「寄碧玉詩」

『全唐詩』卷七百七十五收「失題詩」

『陳後主集』「小纂詩」、「寄碧玉詩」(『漢魏六朝一百三

家集』)

『陳後主集』「小窓詩」、「寄碧玉詩」(『漢魏六朝名家

集』、宣統三年上海文明書局排印本)

『全唐五代小說』卷六七收「南部烟花錄」(李時人編

校、何滿子審定、陝西人民出版社、一九九八年、

西安)

## 校定 大業拾遺記(隋遺錄 卷上)

大業十二年、煬帝將幸江都。命越王侑留守東都。宮女  
半不隨駕、爭泣留帝言、

「遼東小國、不足以煩大駕。願擇將征之。」

攀車留惜、指血染鞅。帝意不回。因戲飛白題二十字、

賜守宮女云、

「我夢江南好、征遼亦偶然、但留顏色在、離別只今

年。」

車駕既行、師徒百萬前驅。大橋未就、別命雲屯將軍麻  
叔謀、濬黃河入隄、使勝巨艦。叔謀銜命、甚酷。以  
鐵脚木鵝試彼淺深、鵝止、謂濬河之夫不忠、隊伍死水

下。至今兒啼、聞人言「麻胡來」、即止。其訛言畏人皆  
若是。

帝離都旬日、幸宋何妥所進車。車前隻輪高廣、疏釘

為刃、後隻輪下、以柔榆為之、使滑勁不滯、使牛御

焉。自都抵郡、日進御車女。車強垂網、雜綴片

玉鳴鈴、行搖玲瓏、以混車中笑語、冀左右不聞也。長

安貢御車女袁寶兒、年十五、腰肢纖墮、駭治多態。

帝寵愛之特厚。時洛陽進合蒂迎輦花、云、

「得之嵩山塢中。人不知名。採者異而貢之。」

會帝駕適至、因以迎輦名之。花外殷紫、內素膩菲芬、

粉藥、心深紅、附爭兩花。枝幹翠類通草、無刺、葉

圓長薄。其香穠芬馥、或惹襟袖、移日不散、嗅之

令人多不睡。帝命寶兒持之、號曰「司花女」。時詔虞世

南草征遼指揮德音敕于帝側、寶兒注視久之。帝謂世

南曰、

「昔傳飛燕可掌上舞、朕常謂儒生飾于文字、豈人

能若是乎。及今得寶兒、方昭前事。然彘態。今

注目於卿。卿才人、可便嘲之。」

世南應詔為絕句曰、

「學畫鴉黃半未成、垂肩袖惹生。緣却得君王惜、

長把花枝傍輦行。」

上大悅。

孫、上御龍舟、蕭妃乘鳳舸、錦帆彩纜、窮極侈

靡。舟前為舞臺、臺上垂蔽日簾。簾即蒲澤國所進、

以負山蛟矚蓮根絲、貫小珠、間睫編成、雖曉日激

射、而光不能透。每舟擇妙麗長白女子千人、執雕板

鏤翫<sup>20</sup>、號為殿脚女。一日帝將登鳳舸、凭殿脚女吳絳仙肩。喜其柔麗、不與羣輩齒、愛之甚、久不移步。絳仙善畫長蛾眉。帝色不自禁、回輦召絳仙、將藉<sup>21</sup>好。

適值絳仙下嫁為玉工萬羣妻、故不克諧。帝寢興罷、擢為龍舟翫、號曰嵒岫<sup>22</sup>夫人。由是殿脚女爭效為長蛾眉。司宮吏日給螺子黛五斛、號為蛾綠。螺子黛出波斯國、每顆直十金。後徵賦不足、雜以銅黛給之、獨絳仙得賜螺黛不絕。帝每倚簾視絳仙、移時不去、顧內謁者云、

「古人言、秀色若可餐。如絳仙、真可療飢矣。」

因吟<sup>23</sup>篇賜之、曰、  
「舊曲歌桃葉、新粧艷落梅。將身倚輦<sup>24</sup>、知是渡江來。」

詔殿脚女千輩唱之。時越溪進耀光綾、綾紋突起、時有光彩。越人乘樵風舟、泛于石帆山下、收野繭繰之。繰絲女夜夢神人告之曰、

「禹穴三千年一開。汝所得野繭<sup>25</sup>、即江淹文集中壁魚所化也。絲織為裳、必有奇文。」

織成果符所夢、故進之。帝獨賜司花女顏絳仙、他姬莫預。蕭妃恚妬不懌、由是二姬稍稍不得親幸。帝常醉遊諸宮、偶戲宮婢羅羅者。羅羅畏蕭妃、不敢迎帝、且辭以有程<sup>26</sup>之疾、不可薦寢。帝乃嘲之曰、

「箇人無賴是橫波、黛染隆顛簇小蛾<sup>27</sup>。幸好留儂伴成夢、不留儂住意如何。」

帝自達廣陵、宮中多倣吳言、因有儂語也。

帝昏酒滋深、往往為妖崇所惑。嘗遊吳公宅<sup>28</sup>、恍惚間與陳後主相遇、尚喚帝為殿下。後主戴輕紗<sup>29</sup>、青綽袖、長裾、綠錦純緣紫紋方平履。舞女數十許、羅侍左右。中一<sup>30</sup>美、帝<sup>31</sup>目之。後主云、

「殿下不識此人耶。即麗華也。每憶桃葉山前乘戰艦與此子北渡。爾時麗華最恨、方倚臨春閣試東郭<sup>32</sup>紫毫筆、書<sup>33</sup>作答江令<sup>34</sup>「璧月」句。詩詞未終、見韓擒虎躍<sup>35</sup>駒、擁萬甲直來衝人、都不存去就、便至今日。」

俄以綠文測海蠡、酌紅梁新妓<sup>36</sup>勸帝。帝飲之甚歡、因請麗華舞玉樹後庭花。麗華辭以拋擲歲久、自井中出來、腰肢依拒、無復往時姿態。帝再三索之、乃徐起、終一曲。後主問帝、

「蕭妃何如此人。」

帝曰、  
「春蘭秋菊、各一時之秀也。」

後主復詩十數篇、帝不記之、獨愛小窗詩及寄侍兒碧玉詩。小窗云、

「午醉醒來晚、無人夢自驚。夕陽如有意、偏傍小窗明。」

寄碧玉云、  
「離別腸猶斷<sup>37</sup>、相思骨合銷。愁魂若飛散、憑仗一相招。」

麗華拜帝、求一章。帝辭以不能。麗華笑曰、

「嘗聞、此處不留儂、會有留儂處。安可言不能。」  
帝強爲之操觚曰、

「見面無多事、聞名爾許時。坐來生百媚、實箇好相知。」

麗華捧詩、瞎然不懌。後主問帝、

「龍舟之遊樂乎。始謂殿下致治在堯舜之上、今日復此逸遊。大抵人生各圖快樂、曩時何見罪之深耶。三十六封書、至今使人怏怏不悅。」

帝忽悟、叱之云、

「何今日尚自我爲殿下、復以往事訊我邪。」  
隨叱聲恍然不見。

## 校定 大業拾遺記（隋遺錄 卷下）

帝幸月觀、煙景清朗。中夜、獨與蕭妃起臨前軒。簾碎不閉、左右方寢。帝凭妃肩、說東宮時事。適有小黃門映薔薇叢調宮婢、衣帶爲薔薇<sup>3</sup>結、笑聲吃吃不止。帝望見腰支纖弱、意爲寶兒有私。帝披單衣亟行擒之、乃宮婢雅娘也、回入寢殿、蕭妃誚笑不知止。帝因曰、

「往年私幸受娘時、情態正如此。此時雖有性命、不復惜矣。後得月賓、被伊作意態不徹。是時儂憐<sup>3,6</sup>心、不減今日對蕭娘情態。曾效劉孝綽爲雜憶詩、常念與妃。妃記之否。」

蕭妃承問、即念云、

「憶睡時、待來剛不來。卸粧仍索伴、解珮更相催。」

博山思結夢、解水未成灰。」

又云、

「憶起時、投籤初報曉。被惹香黛殘、枕隱金鑲。笑動上林中、除却司晨鳥。」

帝聽之、咨嗟云、

「日<sup>3</sup>晷<sup>3</sup>逝、今來已是幾年事矣。」

妃因言、

「聞說外方羣盜不少、幸帝圖之。」

帝曰、

「儂家事、一切已託楊素了。人生能幾何。縱有他變、儂終不失作長城公。汝無言外事也。」

帝嘗幸昭明文選樓、車駕未至、先命宮娥數千人昇樓迎

侍。微風東來、宮娥衣被風綽、直拍肩頂。帝靚之、

色荒愈熾。因此乃建迷樓、擇下俚稚女居之、使衣輕羅

單裳、倚檻望之、勢若飛舉。又<sup>3</sup>名香於四隅、煙氣霏

霏、常若朝霧未散、謂爲神仙境不我多也。樓上張四寶

帳、帳各異名。一名散春愁、二名醉忘歸、三名夜酣

香、四名延秋月。粧奩寢衣、帳各異製。

帝自達廣陵、解酒失度、每睡、須搖頓四體、或歌吹齊

鼓、方就一夢。侍兒韓俊娥尤得帝意、每寢必召、令

振聳支節、然後成寢、別賜名爲「來夢兒」。蕭妃嘗密

訊俊娥曰、

「帝體不舒、汝能安之、豈有他媚。」

俊娥畏威、進言、

「妾從帝自都城來、見帝常在何受車。車行高下不等、女態自搖。帝就搖怡悅。妾今幸承皇后恩德、侍寢帳下、私效車中之態以安帝耳、非他媚也。」

他日、蕭后誣罪去之、帝不能止。暇日登迷樓憶之、題東南柱二篇云、

「黯黯愁侵骨、緜緜病欲成。須知潘岳鬢、強半爲多情。」

又云、  
「不信長相憶、絲從鬢裏生。閑來倚樓立、相望幾含情。」

殿脚女自至廣陵、悉命備月觀行宮、由是絳仙等亦不得親侍寢殿。有郎將自瓜州宣事迴、進合歡水果一器。帝命小黃門以一雙馳騎賜絳仙、遇馬急搖解。絳仙拜賜私恩、因附紅箋小簡上進曰、

「馱騎傳雙果、君王寵念深。寧知辭帝里、無復合歡心。」

帝省章不悅、顧黃門曰、

「絳仙如何。何來辭怨之深也。」

黃門懼、拜而言曰、

「適走馬搖動、及月觀、果已離解、不復連理。」

帝意不解、因言曰、

「絳仙不獨貌可觀、詩意深切、乃女相如也。亦何謝

左貴嬪乎。」

帝于宮中嘗小會、爲拆字令、取左右離合之意。時查

娘侍側。帝曰、

「我取查字爲十八日。」

查娘復解羅字爲四維。帝顧蕭妃曰、

「汝能拆朕字乎。不能當醉一杯。」

妃徐曰、

「移左畫居右、豈非淵字乎。」

時人望多歸唐公、帝聞之不懌、乃言、

「吾不知此事、豈爲非聖人耶。」

于是奸蠹起于內、盜賊攻于外、直閣裴虔通、虎賁郎將司馬德勤等、引左右屯衛將軍宇文化及將謀亂、因請放官奴分直上下。帝可奏、即宣詔云、

「門下。寒暑迭用、所以成歲功也。日月代明、所以均勞逸也。故士子有遊息之談、農夫有休勞之節。資爾衆、服役甚勤、執勞無怠。溢于爪髮、蟻蝨結于兜鞶。朕甚憫之、俾爾休番從便。噫。無煩方朔滑稽之請、而從衛士遞上之文。朕于侍從之間、可謂恩矣。可依前件事。」

是有焚草之變。

## 大業拾遺記（隋遺錄） 跋 原文

『說郭』炳一百十收『大業拾遺記』。『百川學海』庚集、乙集收『隋遺錄』。『香艷叢書』、『紅袖添香室叢



書』、『宮或遺事』、『筆記小説大觀五編』収『大業拾遺記』。魯迅校録『唐宋伝奇集』収『隋遺録』。

右大業拾遺記者、上元縣南朝故都、梁建瓦棺寺閣。閣南隅有雙閣、閉之、忘記歲月。

會昌中、詔拆浮圖、因開之。得荀筆千餘頭、中藏書一帙、雖皆隨手靡潰、而文字可紀者、乃隋書遺藁也。中有生白藤紙數幅、題爲南部烟花録、僧志徹得之。

及焚釋氏羣經、僧人惜其香軸、爭取紙尾拆去。視軸、皆有魯郡文忠顏公名、題云手寫。是録即前之荀筆、可不拳而知也。

志徹得録前事、及取隋書校之、多隱文、特有符會、而事頗簡脱。

豈不以國初將相、争以王道輔政、顏公不欲華靡前跡、因而削乎。

今堯風已還、德車斯駕。獨惜斯文湮没、不得爲辭人才子談柄、故編云大業拾遺記。本文缺落、凡七十八、悉從而補之矣。

上元縣南朝故都、梁建瓦棺閣。閣南隅有雙籠、閉之、忘記歲月。

會昌年、詔拆浮圖、開之。得荀筆千餘頭、中藏一帙、雖隨手飛潰、而文字可記、乃隋書遺藁也。有白藤紙數幅、題云南部烟花録、僧志徹得之。

及焚經、僧人惜香軸、争取之拆去紙筆。視軸、皆有魯郡文忠顏公名、題云手寫。是經即前之荀筆、可拳而知也。

志徹因將隋書草藁示予、遂得録前事、及取隋書校之、多隱不文、時有符會、事頗簡脱。

豈不以國初將相、争以王道輔政、黃門顏公不欲筆靡前跡、因而削乎

今則堯風已還、德車斯駕。獨惜茲事湮没、不得詞人才子談柄、故編成大業拾遺記。本字缺、凡六十七、悉從而補之。

す）（\*印は異同のある箇所を示

## 『山房集』輯録 跋 原文

南宋・周南撰『山房集』卷五南部烟花録又題

## 校勘表 說郛・百川学海等十三種对照大業拾遺記



(注)

李劍国著『唐五代志怪伝奇叙録』下冊 五五五―五六三頁、南開大学出版社、一九九三年、天津。

李時人編校・何満子審定『全唐五代小説』巻六七 一八七〇頁、陝西人民出版社、一九九八年、西安。

元末明初・陶宗儀纂、**搜鉄校正**『説郭』巻七十八は、「隋遺録二巻全抄 唐顔師古」と題して『隋遺録』を上下二巻に分かたずに輯録していて、巻末に跋はない。

この詩句が、元・林坤の『誠齋雜記』巻下(『津逮秘書』収)、明・馮惟訥編『詩紀』巻一〇八、元明間無名氏の「施仁義劉弘嫁婢」雜劇(『脈望館鈔校本』)第一折にも見えると、金文京「大津皇子『臨終一絶』と陳後主『臨行詩』」(『東方学報』京都第七三冊二〇〇一年)は指摘している。

前野直彬編訳『六朝唐宋小説選』「解説」、中国古典文学大系24、平凡社。

近年出版された『全唐五代小説』について気づいたことを付記しておく。この労作を多としたいが、校定の正確さにおいて疑問をいだくところはいくつかあった。例えば、【校】欄「五」の校語に、「生」、底本作「攻」、據《百川学海》改”(一八七〇頁)とあるが、『百川学海』は「攻」であつて「生」ではなく、この校語は成立しない。「生」とする文献は、魯迅本『唐宋伝奇集』のみであるから、「據魯迅《唐宋伝奇集》改」とすべきところである。また、伝わる版本のすべてが「愁魂」とするところを、魯迅は「愁雲」とし、

本書も「愁雲」としている箇所があるが、本書は「正文則以《説郭》為底本校録」と底本を明記しているにもかかわらず、ここでは底本を採用せずに魯迅を採用したむねの校語がここにはない。さらにまた、「帝因曰」とすべきところを、本書のみが「帝問曰」としているのは(一八六七頁)、校正上の見落しであろうと思われる。

追記

大業拾遺記を解釈し日本語に訳す上で、現在岡山大学文学部の招聘を受けて来日中の王枝忠客員教授より、具体的で示唆にとむ指摘と教示を受けた。氏は、福州大学教授で福建省政協委員、中国三国演義学会理事等の要職を併任しておられる。また拙論は、花園大学文学部・衣川賢次教授より受けた貴重な指摘に啓発されて準備されたものであることを申し添えておく。ここに記して感謝の意を表したい。